

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

地獄の黙示録 特別完全版

2002 (平成14) 年2月11日鑑賞

Data

監督: フランシス・フォード・コッポラ

出演: マーロン・ブランド/マーティン・シーン/ロバート・デュバル/ハリソン・フォード

👁️👁️ みどころ

3時間30分の特別完全版。とにかく長い。テーマが重い。見るのにしんどい。戦争の狂気はよく分かる。まさに地獄の黙示録というタイトルがピッタリ。しかし今ベトナム戦争の意味を分かる若者は…。案の定、観客はガラガラ…。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<3時間30分の超大作>

これは1980年に日本で公開され、大反響をよんだ作品に、53分の未公開映像を加えて新たに編集した、特別完全版。

追加されたのは、

①フランス植民農園のエピソード

(西欧列強の中で最初にインドシナを支配したフランス人たちの、頑固なまでのインドシナの土地への執着心がよく描かれている。また唯一のHシーンを演ずる若き未亡人オーロール・クレマンは魅力的)

②慰問に来ていたプレイボーイのプレイメートのど派手な演出とその後のエピソード

(不時着したヘリの中で、魂を失ったように疲れ果て、燃料とひきかえに身体を提供するプレイメートたちの悲劇)

③マーロン・ブランドの出演部分

(すごく「哲学的」で「重み」があることは間違いないが、はたしてどれ位の観客が理解できるのやら・・・)

で、トータル3時間30分という超大作となった。

＜戦争の狂気と人間＞

ベトナムという「戦場」の中で、自分の大好きなサーフィンをやるために、ある村をナパーム

弾で焼き尽くす、ヘリ部隊の隊長。そのすさまじい戦闘場面。ワーグナーの音楽をスピーカーでガンガン流しながら、アメリカのヘリ部隊「騎兵隊」が殺戮の限りを尽くす場面。予告編で見たいくつかの場面が、なるほどこういうストーリー展開の下に現れるのか、とわかるが、とにかくここに登場する人物たちは「異常」としかいいようがない。

＜基本的ストーリー＞

この映画の基本的ストーリーはこうだ。すなわち、

①かつてのアメリカの優秀な軍人カーツ大佐（マロン・ブランド）は、ベトナムに派遣されながら、アメリカを「裏切り」、密林の奥に潜入して、現地民の支持を得て、「神の大国」をつくっている。

②アメリカは、この「神の大国」をつぶす必要がある。そのため、現地に入り、カーツ大佐を暗殺すべしと命令、その任務をウィラード大尉（マーティン・シーン）が受ける。

③ベトナム戦争という大義名分のわからない戦争に従事する中で、自分の人生を失い、虚無的思想に落ち込んでいたウィラード大尉は、アメリカ合衆国からこのような極秘の命令を受けて、その命令に興味を示す。そしてこれを承諾。数名の部下をひき連れて、巡視艇に乗ってナン川をさかのぼり、カーツ大佐が支配する「神の大国」への潜入を目指す。

④その間、さまざまなベトナム戦争をめぐる戦闘やエピソードが展開される。そしてウィラード大尉はこれらの学習の中、思索を深めていく。

⑤ウィラード大尉は、さまざまな犠牲を伴いながら、やっと「神の大国」へ到着。

そしてカーツ大佐の治める国の意味や、カーツ大佐の思いを、ある意味では共感をもって受け入れている自分に驚き、そのため、自分の任務の遂行をめぐって心の中で葛藤する。この間の、ウィラード大尉とカーツ大佐との哲学的対話は見モノ。

まさに、「地獄の黙示録」というタイトルがピッタリだ。

⑥ウィラード大尉は最終的にカーツ大佐を殺害（カーツ大佐も早く楽になりたいと考えていることを十分に理解したうえ、自分の任務を遂行）。その後、「神の大国」の住民たちは、ウィラード大尉を新たな「神」として崇めようとするが、ウィラード大尉はこれを拒否。帰国の途につく。

＜地獄の黙示録というタイトルの重み＞

この映画については、新聞にさまざまな評論が載せられているが、そのほとんどはこの完全版への讃歌となっている。しかし・・・。

1970年前後のベトナム戦争のこと―その時代的背景やその狂気、そしてその結末―を、今の若者たちはどこまで理解できるのか。きっとほとんどわからないだろう。ベトナム戦争の後も、国際社会では、「平和国家」日本以外では、各種の戦争が展開されている。ロシアの崩壊。アフガンでの戦い。インドとパキスタンの紛争。さらに1993年クリントン政権下でおこった東アフリカはソマリアでの軍事行動。また長年続くパレスチナ戦争。そして、2001年9月11日のアメリカでの同時多発テロ発生を契機とした、アフガン戦争……。このように国際社会が激変している中、1970年前後のベトナム戦争を舞台としたアメリカ人たちの狂気を描くことが今、どこまで意味をもつのだろうか。また、この映画で、まさに「地獄の黙示録」として語られるさまざまな言葉も、今どこまで意味をもつのだろうか。疑問なしとしない。

しかし、とにかく観なければ、この映画の今の時代における価値も理解できない。いくら重くても、しんどくても、いくら長くても、とにかく観てほしい。そして、この映画についての意見を述べて欲しい。そう思う。この映画は、とにかく深く考えざるを得ない映画だから。

2002（平成14）年2月記